

助成年度：平成 28 年度

[所属] 金沢大学 人間社会研究域

[役職] 准教授

[氏名] 大野 智彦

[課題]

ダム撤去は流域社会にどのような影響を与えるのか？ 質的社会調査と流域環境史からの多面的把握

[内容]

近年、森川里海の連関の重要性が注目され、その再生に向けた取り組みが各地で行われている。2014年には水循環基本法が策定され、今後ますます流域単位での水、物質、生物の循環を健全に保つ取り組みが重要となる。そうした流域循環の健全化という観点から注目されるのが、世界的にその数が増加しつつあるダム撤去を契機とした環境再生である。ダム撤去は、世界的に見てもまだ歴史の浅い事柄であり、日本では大型ダムの撤去としては荒瀬ダム撤去が初めての経験である。そうした事柄が、流域社会という複雑なシステムにどのような影響を与えるのか定まった知見がない。そこで本研究では、SES フレームワークを手掛かりとして、流域環境史と質的社会調査によって探索的にダム撤去が流域社会に与える影響を分析した。

その結果、流域環境史の分析からは、ダム建設以前から河川と流域社会の関わりには大きな変化が見られたこと、荒瀬ダム建設以降は水害という否定的な形で主に河川との関わりが意識されていたことが明らかとなった。質的社会調査からは、ダム撤去の影響として水、生物、河口・干潟・海、被害の軽減、交通の5つを特定することができた。水や生物の状態の改善を受けて、周辺では川を活かしたまちづくりや、地域と川との関わりの復活が見られた。しかし、これらはいくまでも短期的で目に見えやすいものであり、蓄積された悪影響や、ダム撤去とは直接関連しないものの流域社会に影響を及ぼしている人口減少などの課題があることが明らかとなった。今後は、こうした長期的な影響を解明するべく、継続的に流域社会の変化の観察を続けていく必要がある。